

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：16401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520634

研究課題名(和文) 遠隔チューター参加による少人数グループ化日本語授業の有効性に関する研究

研究課題名(英文) A Study of the Model of Japanese Class Using Japanese Students as a Private Language Tutor by Video Call

研究代表者

大塚 薫 (OTSUKA, KAORU)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授

研究者番号：30372733

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、遠隔地(海外)にいる日本語学習者に対して、インターネットを通じて会話及び作文教育を多様な方法で実施し、その効果を検証し教育現場での直接的な応用を研究するものである。

具体的には、韓国において大人数クラスで行われる遠隔教育授業内に教授者とともに複数の日本人学生チューターを構え、学生間の相互交流を図るとともに、学習者にとっては日本語能力の、チューターにとっては日本語教授能力の向上を育成することを目標として実践的な遠隔授業が行われた。中国においては、インターネット回線の速度に限界があり、既存のカリキュラム内に日本語教育関連以外の産官学の専門家による主題別講義形式の授業を構築した。

研究成果の概要(英文)：This research is a model of Japanese language class which Japanese students support as a private language tutor in Korea. Japanese language classes on university in Korea have many students per one Japanese native teacher. It is difficult to have enough chance to speak Japanese. In this study, Japanese language class was planned to attend 5 to 10 Japanese university students as a Japanese language tutor by internet video call (Skype) on more than 20 Korean students. Japanese language tutors not only taught in the class but also had private after school lessons. The result showed Korean students were able to receive advices for presentation and practice Japanese language, and Japanese student's interest and enlightenment in Korea were increased.

研究分野：日本語教育学

キーワード：遠隔教育 チューター グループワーク 日本語授業 有効性 参加型授業 協働 双方向型授業

1. 研究開始当初の背景

日本語教育分野において、IT技術の発達は、多種多様で効率的な授業形態を可能にした。これにより、大塚(2004)では対面授業と比較し、より効果的な授業をするために誰もが簡単に無料で利用可能な SNS(social networking service)を授業に応用した研究が実施された。これは、教授者が対面授業時に SNS を授業の補助手段として応用した授業を通して考察を行ったものである。その授業を始めとして、2005-2006 年度にかけては科学研究費の補助を受けて若手研究(B)「インターネットコミュニティを利用した遠隔作文教育における教材開発に関する研究」(研究代表者 大塚薫、課題番号 17720127、研究期間 平成 17-18 年度)を実施した。これは、インターネットの普及が活発な韓国の大学における日本語学習者を対象に、日本現地のネイティブ教授者による SNS 及び画像音声チャット機能を利用した様々な形態の授業を実施し分析、考察を行ったものである。このような研究を実施してきた 2、3 年の間にも IT 技術及びインターネット回線速度は向上し、以前の研究で最大の問題点であった画像チャット機能における画面の大きさ及び音声や画像の停止、遮断などの問題は飛躍的な改善を遂げた。このような環境の変化に伴い、IT 技術を応用した日本語教育における授業方式の効率化のための研究の一環として 2007-2010 年度にかけて科学研究費補助金により「無線インターネットを利用したネイティブ教授者参加型チームティーチング授業の研究」(研究代表者 大塚薫、課題番号 19720124、研究期間 平成 19-22 年度)が行われた。ここでは、コンピュータ及びウェブカメラさえあれば誰でも利用できるインターネット画像通話機能を利用して授業が実施された。具体的には、韓国内の高等学校及び複数の大学において現地の非ネイティブ教授者と日本国内のネイティブ教授者が遠隔

参加型協働授業(チームティーチング)を実施して問題点及び効率性に関する考察を行った。このような遠隔協働授業におけるネイティブ教授者の役割としては、話す・聞く・読む・書くの四技能の中では、学習者の話す・聞く及び書く技能に特化した授業において貢献度が高いことが分かった。

以上のようなコンピュータ及びインターネットを利用した授業効率化のための研究は現在、さらなる変化を見せつつある。従来は、学校及び公共教育機関においては有線 LAN を利用した授業のみが可能であった。つまり、特定有線 LAN が完備されている教室内で、固定された設備及びコンピュータを利用した授業のみが行われていたということである。これは、画像を通じて実施される遠隔参加型授業が一つの場所ではただ一名のみの参加が可能であることを意味している。しかし、無線 LAN 技術の普及及び廉価なノート・パソコンまたは iPhone、iPad 等の無線インターネット端末によるコンピュータの急速な普及は新しい形態の授業を可能とした。

現在、海外の高等教育機関及び高等学校の日本語教育における会話及び作文授業では、一人の教授者に対して 20~50 名の多数の学習者が参加しており、対話型授業よりは単純詰めこみ型授業が行われている状況が多々見られる。しかし、このような授業に複数のノート・パソコン及び無線端末が利用されることにより、複数の日本にいるチューターを授業に参加させることで小グループ化が図られ、会話及び作文授業の効率性の極大化が期待される。

2. 研究の目的

本研究は、現在までの研究の流れを汲み、学習者にとってネイティブ教授者の必要度が高かった会話及び作文の授業を中心とする。海外においてはネイティブ教授者の数が

限られており会話のクラスにおいても 20～50 名程度の大人数クラスで授業を受ける場合がしばしばある。その現状を鑑みて、日本現地の日本語教育を志す学生をチューターとして、授業内で小グループを作り各グループをチューターが担当しネットを通じて対話を試み、学習者の日本語力向上を図るとともに相互理解を深めていくというコンセプトのもと授業を実施する。特定の大人数クラスを取り上げ、クラス内で何名のチューターが指導に当たるのが適切かについても調査を進める。

研究期間内においては、以下の 3 点の目的を達成していく。

- (1) 日本人チューターと日本語学習者の相互交流を図り、チューターにとっては日本語教授能力の、学習者にとっては日本語能力の育成を図るべく遠隔授業方法の応用を分析、研究する。
- (2) 大人数クラスにおいてチューターとして複数の日本人学生を活用した日本語教育方法を構築する。
- (3) 遠隔教育における会話及び作文授業において、日本語学習者のコミュニケーション能力が向上するための授業の案を樹立する。

3. 研究の方法

本研究は、現在までの遠隔教育の研究結果を踏まえて、学習者のコミュニケーション能力の育成を目指した実践的な遠隔授業方法を構築するものである。具体的には、前回の研究で行った遠隔地(海外)における大学の日本語授業内に現地の教授者及びネットを通じて参加した日本の教授者が協働で実施したチームティーチング授業と今回行う複数のチューター参加型少人数グループ別授業を比較し、学習者のコミュニケーション能力の向上に関する授業分析を実施する。

また、複数のチューター参加型遠隔会話授

業において、少人数グループを何名で形成するのが妥当かについても同一クラス内でチューターの人数を変えて授業を実施し、学習者の発話・質問回数及び内容や授業アンケートを分析した上で明らかにしていく。さらに、日本語学習者の多い国である韓国・中国における日本語学習者を対象に、レベル別に複数チューター参加型遠隔会話及び作文授業を実施し、レベル並びに国によって学習者の日本語能力の向上がいかにかに影響を受けるかを調査する。

その上で、各授業別に調査したデータを比較・分析し、コミュニケーション能力育成に特化した複数チューター活用授業の実践的な応用を考えていく。また、チューター参加型遠隔教育による効果的な会話及び作文教材のコンテンツを開発し、データベース化を図る。

遠隔授業の方法としては、複数の日本人チューターがインターネットを通じて遠隔地(海外)の大人数クラス(20～50 名程度)の日本語授業に接続し、少人数グループ(5～6 名程度)の会話・作文教育を現地の日本語教授者の指導の下、韓国並びに中国の日本語学習者を対象として進めていくものである。授業は、現地の日本語教授者が進行をコントロールするが、基本的には、チューターと学習者による対話を通して進行していく。チューターは授業内で分けられた各グループのパソコンに自宅や大学等から接続し、少人数グループを担当し小グループ内での会話及び作文の指導に当たる。現地の日本語教授者は、チューターが学習者の質問や指導に戸惑っている場合、そのグループに参加しチューターを手助けする。

授業においては、予め SNS 上に載せられた課題について考えさせた後に授業に臨むよう学習者を指導する。会話の授業では、小グループに分かれてテーマに基づいた討論を中心に意見を交わし合う方式で授業を行う。

作文の授業では、学習者が課題として書いてきた作文をグループ内で順次発表し、それに対するピア・レスポンスを行う方法で授業を進行していく。チューターは日本における考え方や自分の意見を示し、学習者にある種の問題提起を行う役割も担う。

4. 研究成果

本研究で行われた遠隔協働日本語授業は、以下の通りである。

- (1) 期間：2011年9月～12月
授業時間・回数：週1回150分(75分×2コマ)
全16回(遠隔6回)
学習者：韓国人日本語専攻学生22名
教授者：韓国側：日本語母語話者教師
日本側：日本人学生チューター9名
授業方法：1名のチューターが1グループ(3・4名)を担当
使用機器：各国パソコン6台ずつ
アプリケーション：Skype
- (2) 期間：2012年3月～6月
授業時間・回数：週2回75分×2コマ
全32回(遠隔9回)
学習者：韓国人日本語専攻学生22名
(中国人学生1名)
教授者：韓国側：日本語母語話者教師
日本側：日本人学生チューター10名
授業方法：全体・グループ画像接続 個別チューター接続
使用機器：各国パソコン・個人スマートフォン
アプリケーション：Skype、Time Viewer
- (3) 期間：2012年9月～12月
授業時間・回数：週1回150分(75分×2コマ)
全16回(遠隔6回)
学習者：韓国人日本語専攻学生30名
教授者：韓国側：日本語母語話者教師
日本側：日本人学生チューター5名
授業方法：1名のチューターが1グループ(5・6名)を担当
使用機器：個人スマートフォン
アプリケーション：Kakao Talk
- (4) 期間：2012年10月～12月
授業時間・回数：日本側：週2回180分
全32回(遠隔5回)
中国側：週1回80分
全17回(遠隔5回)
学習者：日本側：留学生18名
中国側：日本語専攻学生24名
教授者：日本側：日本語母語話者教師
中国側：日本語母語話者教師
授業方法：全体画像接続による自己紹介、発表の仕方の説明、討論等
使用機器：パソコンまたはiPad 各国2台ずつ
アプリケーション：Skype、Time Viewer
- (5) 期間：2013年3月～6月
授業時間・回数：週2回75分×2コマ

- 全32回(遠隔10回)
学習者：韓国人日本語専攻学生23名
教授者：韓国側：日本語母語話者教師
日本側：講義担当講師6名・留学生10名・地域住民5名
授業方法：全体画像接続による講義、質疑応答、発表
使用機器：パソコン各国1台ずつ
アプリケーション：Skype、Time Viewer
- (6) 期間：2013年10月～12月
授業時間・回数：日本側：週1回90分
全15回(遠隔10回)
中国側：週1回160分
全17回(遠隔10回)
学習者：日本側：留学生11名・日本人学生3名
中国側：日本語専攻学生21名
教授者：日本側：講義担当講師5名・中国人民大学院生1名
中国側：日本語母語話者教師・日本語非母語話者教師
授業方法：全体画像接続による自己紹介、講義、質疑応答、討論等
使用機器：パソコン各国1台ずつ
アプリケーション：Skype、Time Viewer
 - (7) 期間：2014年4月～6月
授業時間・回数：日本側：週1回90分
全15回(遠隔6回)
韓国側：週2回150分
全32回(遠隔5回)
中国側：週1回80分
全17回(遠隔6回)
学習者：日本側：留学生12名・日本人学生2名
韓国側：日本語専攻学生11名・他2名
中国側：日本語専攻学生21名
教授者：日本側：講義担当講師3名
韓国側：日本語母語話者教師
中国側：日本語母語話者教師・日本語非母語話者教師
授業方法：全体画像接続による講義、質疑応答、討論
使用機器：パソコン各国1台ずつ
アプリケーション：Skype

これらの遠隔協働日本語授業は、特別な施設がなくてもインターネットに接続可能な個人のコンピュータとウェブカメラとマイクさえあれば、誰でも利用可能な画像通話機能を使用して行われた授業であり、双方の顔を見ながら対話できる安定的な一般教室内の設備のみで行われたものである。

(1)～(3)が遠隔チューター参加による少人数グループ化日本語授業であり、無線インターネット環境がある程度整っている日本

と韓国を繋いで行われた授業である。韓国側で行われている正規の授業に日本現地から日本人学生チューターが接続し、小グループに分かれて討論を行うという形で交流が行われた。

(4)～(7)は遠隔協働日本語授業であり、(4)と(6)は日本と中国を、(5)は日本と韓国を繋いだものであり、(7)は日本と韓国と中国の3ヶ国間を繋いで行われた遠隔授業である。(5)は、韓国で行われている正規の授業に日本現地の講義担当教員並びに地域の住民、留学生が遠隔で接続し、講義や質疑応答、相互の交流が行われた。(4)・(6)・(7)は、日本と中国または日韓中の3ヶ国のそれぞれで正規の授業が並行して行われ、その授業の中で遠隔講義とその講義内容に関する質疑応答、討論が盛り込まれた授業を構築した。

(1)～(3)の遠隔チューター参加型少人数グループ化授業の特長としては、以下の4点が挙げられる。

日本人チューターと日本語学習者の相互交流を図り、前者にとっては日本語教授能力が、後者にとっては日本語能力が育成された。

大人数クラスにおいてチューターとして複数の日本人学生を活用することにより、日本語学習者の動機づけを高め、聞き手を意識した日本語授業の構築が図れた。遠隔教育における日本語授業で、双方向型のフィードバックの機会を取り入れることにより、日本語学習者のコミュニケーション能力が向上するための授業方法が樹立された。

授業の進度に沿った会話中心の課外補習を行うことにより4技能の連係が図られ、より実践的なコミュニケーションスキルを修得することができた。

また、(4)～(7)の遠隔協働日本語授業においては、以下の4点の特長が見られた。

リアルタイムで日本語を使用し日本人を

始め、複数の国の日本語学習者同士で交流することができた。

複数の国で同時に日本語教育専門外の教員によるオムニバス形式の講義の受講が可能であった。

留学前に協定校に関する情報を得ることができ、留学先の教員や学生との繋がりが築けた。

国内外で日本の大学の専門の講義内容を聞くことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

大塚薫・王勇萍・林翠芳・斎藤麻子・若月祥子、産官学の専門家による日韓中協働遠隔日本語授業の試み、韓国日本語学会第31回国際学術発表大会論文集、査読無、韓国日本語学会、2015、pp.143-149
大塚薫、中日協働遠隔日本語授業の実証研究、北京日本学研究中心 対照言語行動学研究会 北京共同シンポジウム2014「言語研究と日本語学：現状と将来」、査読有、2014

<https://docs.google.com/viewer?a=v&pid=sites&srcid=ZGVmYXVsdGRvbWVpbnx0YWVlzaG9nZW5nb2tvdWRvdXxneDo3NzAzODg5NTU3MWRjOTdm>
大塚薫・林翠芳・王勇萍、Skype を利用した日中遠隔協働日本語授業の構築、SYDNEY-ICJLE2014 シドニー日本語教育国際研究大会 proceeding、査読有、2014
<https://icjle2014.arts.unsw.edu.au/jp/program?id=688&t=ppid>

大塚薫、遠隔日本語教育の現況と展望、韓国日語教育学会 2013 年度第 23 回国際学術大会 proceeding、韓国日語教育学会、査読無、2013、pp.46-49

斎藤麻子・大塚薫・若月祥子・林翠芳、Skype を使ったアカデミック日本語授業の試み 日韓協定校の事例、日本語文化、査読有、第 25 輯、2013、pp.225-243
大塚薫・王勇萍、日中二大学間協働日本語遠隔授業の構築 授業内容の樹立を中心に、高知大学留学生教育、査読有、第 7 号、2013、pp.65-81

若月祥子・大塚薫、読み手を意識した作文授業の試み 日本人学生を遠隔チューターとして、日本学報、査読有、第 93 輯、韓国日本学会、2012、pp.43-52

[学会発表](計10件)

大塚薫・王勇萍・林翠芳・斎藤麻子・若

月祥子、産官学の専門家による日韓中協働遠隔日本語授業の試み、韓国日本語学会第31回国際学術発表大会、2015年3月21日、徳成女子大学校(韓国)

大塚薫・林翠芳・王勇萍、Skypeを利用した日中遠隔協働日本語授業の構築、SYDNEY-ICJLE2014 シドニー日本語教育国際研究大会、2014年7月12日、シドニー工科大学(オーストラリア)

大塚薫、中日協働遠隔日本語授業の実証研究、北京日本学研究中心 対照言語行動学研究会 北京共同シンポジウム2014「言語研究と日本語学：現状と将来」、2014年3月22日、北京外国語大学(中国) 斎藤麻子・大塚薫・若月祥子・林翠芳、Skypeを使ったアカデミック日本語授業の試み 日韓協定校の事例、韓国日本語文化学会2013年度春季国際学術大会、2013年6月1日、慶熙大学校(韓国)

若月祥子、Skype とカカオトークを用いた作文授業の実践報告、韓国日語教育学会2013年度第23回国際学術大会、2013年4月27日、漢陽サイバー大学校(韓国)

大塚薫、遠隔日本語教育の現況と展望、韓国日語教育学会2013年度第23回国際学術大会、2013年4月27日、漢陽サイバー大学校(韓国)

宮崎聡子・大塚薫・若月祥子、コミュニケーションのための日本語授業の実践 複数の人的リソースを活用して、韓国日本研究団体 第1回国際学術大会 韓国日本学会(KAJA)第85回学術大会、2012年8月24日、淑明女子大学校(韓国)

大塚薫・宮崎聡子・若月祥子、遠隔チューター参加による日本語実践授業の構築、第5回「日本語教育とコンピュータ」国際会議(Castel/J)、2012年8月21日、名古屋外国語大学(愛知)

大塚薫・若月祥子、遠隔チューター参加による少人数グループ化作文授業の実証研究、日本語教育国際研究大会名古屋2012、2012年8月19日、名古屋大学(愛知)

若月祥子・大塚薫、読み手を意識した作文授業の試み 日本人学生を遠隔チューターとして、韓国日語教育学会2012年度第21回国際学術大会、2012年4月28日、建国大学校(韓国)

〔図書〕(計2件)

大塚薫、遠隔チューター参加による少人数グループ化日本語授業の有効性に関する研究、2015年、75頁

大塚薫・李暉洙、遠隔日本語教育研究、日本語学研究の最前線2012、pp.447-463、韓国日本語学会編、2012年、480頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.jimu.kochi-u.ac.jp/~soran/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大塚 薫 (OTSUKA, Kaoru)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・准教授

研究者番号：30372733

(2) 研究分担者

林 翠芳 (LIN, Cuifang)

高知大学・教育研究部人文社会科学系・教授

研究者番号：00341628

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

斎藤 麻子 (SAITO, Asako)

韓国明知大学校・人文学部日語日文学科・教授

若月 祥子 (WAKATSUKI, Sachiko)

韓国弘益大学校・造形学部・助教授

王 勇萍 (WANG, Yongping)

中国安徽大学外国語学院日本語学科・助教授

宮崎 聡子 (MIYAZAKI, Satoko)

岡山大学社会文化科学研究科・非常勤講師

金 才鉉 (KIM, Jaehyun)

前高知北高等学校講師